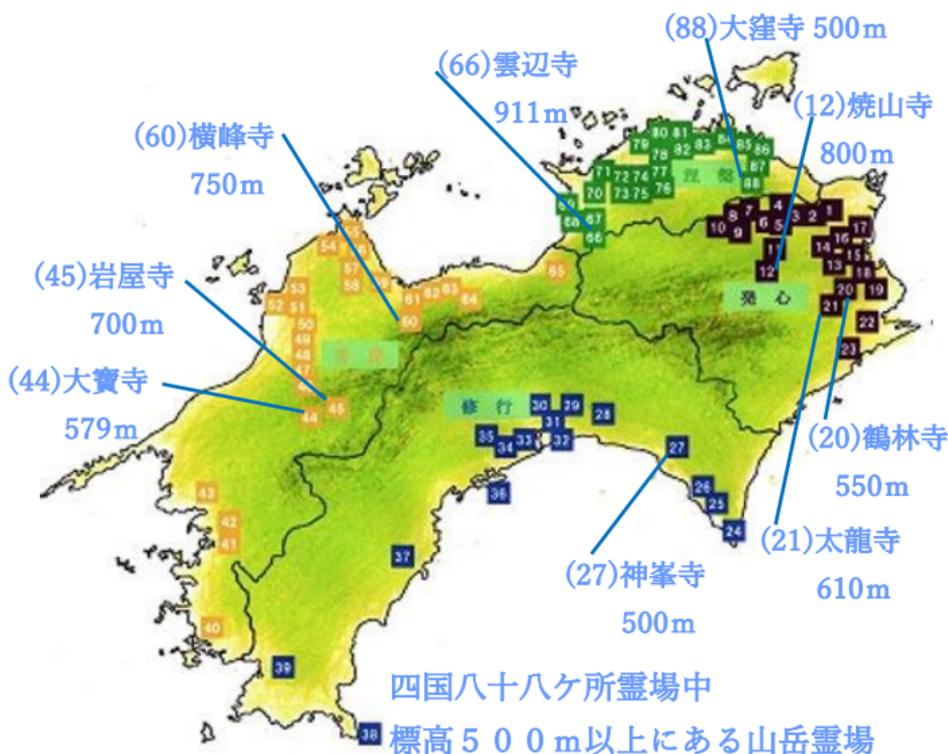


四国遍路▶山岳霊場



四国八十八ヶ所の霊場の中で、標高500m以上にある山岳霊場は9カ所ある。

今ではほとんど車で近くまで行けるようになった。

歩き遍路にとって山岳霊場への道のりは厳しい。自然の息吹が清らかにある霊山では、瞑想の効果をより高めることが出来る。

行者は、山の霊場で「ホトケ」と対峙し、真実の自己を見つめる。参考までの遍路回想備忘録。

① 第12番 摩廬山 焼山寺

(まろざん、しょうざんじ) 標高800m



阿波の霊場。第11番「藤井寺」の藤棚の下で野宿。

翌朝「遍路ころがし」と呼ばれる山道を、約7時間歩いて「焼山寺」に到着した。

石段を登り山門をくぐると、霊場には杉の大木がそびえ立ち、幽玄の気が漂っている。

昔、この山を訪れた空海が、村人を苦しめていた火を噴く悪蛇を「虚空蔵菩薩（こくぞうぼさつ＝無限の福智）」の剣で岩に封じこめたという伝説がある。

宿泊を申し出ると、宿坊に泊めてもらえることになり、夜、住職さんに話を聴くことができた。



焼山寺本堂

静かな山の夜、遍路の途上で聴く法話は格別であった。

何ものにも執われない「空」のころー「ホトケ」の道は「我」を捨ててゆく道ー大師の「心」ー「今」を生きることーなど。

宿泊客はただ一人。

静かな霊山の夜、虚空蔵菩薩を慕って就寝に着いた。

翌朝、すがすがしい山の空気ー。

「朝起きて、トイレに行き小便をする

ああ、今日も生きておられた。

ありがとうございます。」

それが般若心経の心だと住職さんが言われた。

(車だと霊場近くの駐車場に止めて参拝出来ます)

② 第 20 番 霊鷲山 鶴林寺

(りょうじゅざん、かくりんじ) 標高 550 m



雨も上がり、
ふもとの登山口から約 4 km、
途中道なき道、
背丈ほどあるカヤの中、
雨に濡れた草をかき分けながら、
ずぶぬれになって霊場にたどり着いた
「鶴林寺」本堂入口の左右には
阿（あ）と吽（うん）の「鶴」の像が

立っている。

昔、この山で空海が修行していた時、
2羽の鶴が黄金に輝く小さな地蔵菩薩
を守護しているのを見た。

空海は地蔵菩薩を木で刻んでその胸に
その黄金の菩薩を安置したと伝えられ
ている。

参拝を終え、暮れなずむ境内、
全身びしょぬれのまま、
一人途方に暮れていた。

「ふもとまで乗っていきませんか…」



ふりむくと、小さなおじいさんが心配そうにこちらを見ていた。

遍路ではお接待は断ってはいけないと聞いていたし、何よりも疲れ果てていた。

フラフラとおじいさんについていくと車の中におばあさんがいた。

二人でお四国を巡礼しているのだという。

おじいさんは、大変気を使ってくれ、くねる山道を下り、ふもとの民宿まで乗せて行ってくれた。

大師の救いか、
2羽の鶴の恩恵か。

老夫婦に感謝。

困った時に、助けられるということのありがたさをしみじみと知った。

③ 第21番 舎心山 太龍寺

(しゃしんざん、たいりゅうじ) 標高610m



民宿竜山荘から「太龍寺」までは約4.4 km。深い木立の山道を登っていった。

途中「北舎心」という岩山の行場を巡る。石の門柱を過ぎると大きな本坊がある。長い廊下の天井には巨大な竜の絵が描かれている。

更に石段を登っていくと多宝塔がそび

え、それを囲むように本堂と大師堂が建っている。

この山で空海は「虚空蔵求聞持法（こくぞうぐもんじほう）」を修行していた。

虚空蔵菩薩の真言を百万遍唱えると、一切のホトケの教法を会得できるという修行らしい。

本堂の横に苔むした屋根の求聞持堂がある。更に奥に「南舎心」という霊域がある。



太龍寺捨身ヶ岳の求聞持大師

その日は、高台にある多宝塔の縁側で
一日瞑想して過ごした。

木立に白い霧が漂いはじめ、あたり一
面幽玄な気が漂う。

しばらくすると雨が降り出した。

雨の音を聴きながら瞑想は続く。

いつしか身も心も大空に溶け入り広が
ってゆく。

雨が降っているのに「光る空」に包ま
れているような、言いようの無い境地
を体現していた。

夕刻、暗くなって来たので、再度本堂
へ行き、般若心経を唱え虚空蔵菩薩を
念じた後、土間の隅っこにゴザを敷い
て、タオルケットにくるまって横にな
った。

夜いつ時か、夢うつつか、

真っ暗な堂内に灯りが舞って、

数珠を繰る音が数秒ほど聞こえた。

次の日は雨も上がっており、何か蘇ったような新しい朝であった。

(現在では、[ロープウェイ](#)で登ることが出来ます／全長 2,775m 西日本一の長さ)

④ 第 27 番 竹林山 神峯寺

(ちくりんざん、こうのみねじ) 標高 500m



土佐の霊場に入り、太平洋沿いに長い長い海岸線を歩いた。

2日間「空と海」を見ながら歩き、

室戸岬に着く。

空海が修行していた

「みくろど」という洞窟を探検し、
第24番「最御崎寺(ほつみさきじ)」
の宿坊に泊まった。

翌日更にいくつかの霊場と岬を巡る。
…その日は「神峯寺」の登り口近くにある「とおの浜」という砂浜で野宿した。

素晴らしい月の夜だった。

翌早朝、真っ縦(まったて)と呼ばれる急勾配の坂を約4km登ってゆく。

幕末、岩崎弥太郎(三菱財閥創業者)の母がこの坂を21日間往復してわが子の出世を祈願したといわれている。

霊場は山の斜面にあり

本尊は「十一面観世音菩薩」。

石組から流れる小さな滝の音が心地よい。

「まあ、朝早くから。ゆっくりしていきなさい。」

住職さんが声をかけてくれて本坊に案内してくれた。

山の中の別荘のような部屋、奥さんがお茶とお菓子を出してくれた。

静かな早朝の山、

美しい山水の境内をながめ、

遍路の身ながら心温まる

至福のひとつときであった。



神峯寺本堂と大師堂

山を降りて行くとき、太平洋の水平線が丸く見え、地球に住んでいることを実感する。

次の霊場へ向かう途中、仙人風のお遍路さん「四国ルンペン」という人と出会った。

四国に一文無しで渡って来て、托鉢（たくはつ）しながら巡礼している世捨人である。

その方と一緒にしばらくの間、遍路道を歩いて行った。



⑤ 第44番 菅生山 大實寺

(すごうさん、だいほうじ) 標高579m



太寶寺

伊予の霊場。霧の宇和盆地を過ぎ、
一日中雨の中を歩いていた。
小田の遍路宿に宿泊し、
翌朝、小田深山の山道を歩いて行った
雨上がりの陽ざしに、
樹林のさわやかな香り…
草の露は輝き、小鳥たちは歌い、
樹々が生き生きと風に揺らいている。

真弓峠を越えると景色は一変する。
急に空が開けたような久万高原一。

「大寶寺」は四国霊場八十八番中、
中間に当たる鎮守の森のような霊場である。

大きな杉がそびえ立ち、

仁王門をくぐって石段を登ってゆくと
高台に本堂、大師堂がある。

本尊は「十一面観世音菩薩」。

空海はこの山で、真言密教の三密の修



行をされたといわれている。

三密とは

如来（ホトケ）の

「**身体・言葉・意念**」の働きである。

行者は、手に印を結び（身）

口に真言を唱え（口）

心に本尊を念じて（意）

本尊と一体化し

本尊が持つ力を

現実に吹き込むことが

できるようにと修行をする。

空海は

三密加持（さんみつかじ）の

秘法によって、人々の苦悩を癒し、

運勢を高め、日本を

「密厳浄土（ホトケの国、理想郷）」

にしようとして活動されていた。

⑥ 第45番 海岸山 岩屋寺

(かいがんざん、いわやじ) 標高700m



岩屋寺本堂

たそがれる山道を歩き「岩屋寺」に近づくと奇妙な岩峰が見えてくる。

その岩峰間近の「古岩屋荘」に宿泊。

翌朝、近くの不動尊に詣で「岩屋寺」に向かう。

ふもとの村から約700m、

山深い参道を登って行く。

やがて屹立した断崖にへばりつくようにして建っている本堂にたどり着く。

横のはしごを登ると
岩山のくぼみに入ることが出来る。
その地下の洞窟には

「不動明王」が祀られてある。
昔、空海がこの靈山に来た時、
土佐生まれの女仙人が住んでいて、
天空を自由自在に飛行し、
この山の仙境に遊んでいたという。
空海に接した仙女は、
空海の徳にいたく感動し、
この一山を献上して大往生を遂げたと
伝えられている。

納経所に申し出ると行場の「鍵」を貸
してくれる。

大師堂の奥に、仙女が神通力で割って
通ったという迫割（せりわり）行場が
あり、そこを通って木のはしごを登っ
て行くと「白山権現」が祀られてあ
る。ここに立って空海は



岩屋寺奥之院入口

「山高き 谷の朝霧 海に似て
松吹く風を 波にたとえん」

と詠まれた。そのとおりの風景がある
行場を降りて「鍵」を返し、霊域を散
策した。

景色が見渡せる崖っぶちの場所を見つ
けて、そこで仙女の舞いを慕いつつ、
仙術の書を読みながら瞑想に入ってい
った。

夕暮れせまる頃、

後ろの繁みからガサツという音がした。すると、座っている左横に野うさぎが顔を出したのである。

野うさぎは、瞬きもせず動くこともなく、しばらく横にとどまっていた。

数秒後、さっと身をひるがえして、山の方へと消えて行った。

⑦ 第 60 番 石鉄山 横峰寺

(いしづちさん、よこみねじ) 標高750m



「横峰寺」は、西日本最高峰「石鎚山（1982m）」の北側中腹に位置する。

いくつかの参拝ルートがある。

自転車遍路をした時は、

石鎚神社から石鎚山へと向かい、

途中、修験道場「極楽寺」を参拝、

石鎚旧登山口がある「河口」近くの

横峰寺登山口から登った。そこから霊場までは約3時間の道のり。

昔、空海が

「業(ごう)のモエ(燃え)坂よのう」

と詠った険しい山道である。

その日は、自転車遍路の旅に出て

21日目、最後の結願の日であった。

深山幽谷、汗だくでひたすら歩く。

途中、沢の水に癒され、登ってゆく。

いつ時か、ふと腰のあたりに暖かさを感じた。

不思議な事に、二人の小さな天女がささやくように腰を押してくれていた。その感触に思わず涙があふれ出てどうしようもなかった。

小さな天女たちは、ずっと体を前へ前へと押してくれ、ついに「星が森」まで運んでくれた。

そこで天女たちはほほえみ、手を振るように山の方へと消えて行ったのである。



星が森・石鎚山遥拝所

人は幻覚だというだろう。

四国遍路の靈驗伝説は果てしない。

「星が森」は

「横峰寺」の奥の院であり、

石鎚山が遥拝できる靈地である。

この地で役行者(えんのぎょうじゃ)も

行基(ぎょうき)も

空海も修行をしている。

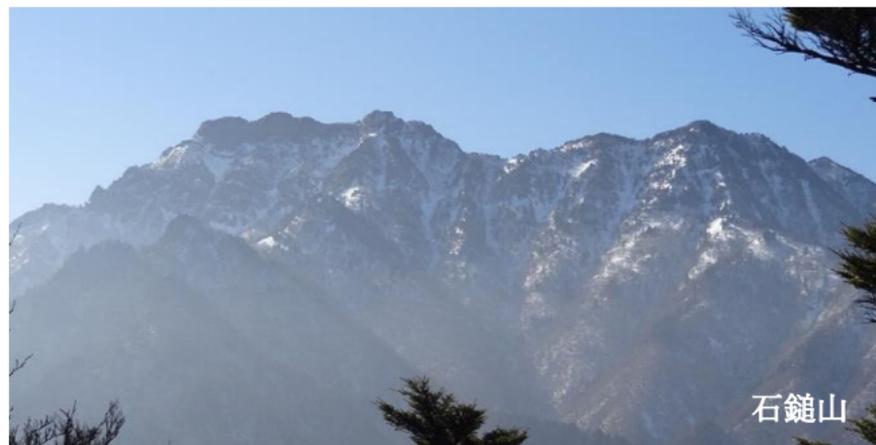
空海はこの

「星が森から石鎚山頂まで

空を飛んで行った」

という伝説がある。

空海は、密教の聖典「大日経」にある



石鎚山

「この身を捨てずして神境通を逮得し
大空位に遊歩して、しかも身秘密を
成ず」という句を説明し、
独自に「即身成仏儀」を著している。
空海は神変加持力を修得され実践されて
いた。

「横峰寺」は山の窪地に立っている。
本尊は「大日如来」。
役行者が「金剛蔵王大権現(修験道の
本尊)」を祀り、
行基が「大日如来(真言密教の中心仏)」
を刻み
その中に役行者の像を納めて安置し、
空海が寺院を建立して霊場に定めたと
伝えられている。

(現在、「モエ坂」のルートはそうとう荒れている
模様。歩き遍路は通常、湯浪(ゆうなみ)ルート
をゆく。車では[有料の林道](#)が開設されていて、寺
院近くまで行けるようになっていきます)

⑧ 第66番 巨龍山 雲辺寺

(きよごうざん、うんぺんじ) 標高911m



雲辺寺大師堂

讃岐の霊場。

「雲辺寺」は、四国八十八ヶ所中、一番高い標高にある山岳霊場である。長い坂を歩き、境目トンネルを抜けて、登山道のような山道を登ってゆくと、高原のように開けた山の林道と交わる。更に巨木の立ち並ぶ森を歩いて雲辺寺山にたどり着く。

御詠歌に

「はるばると 雲のほとりの寺に来て
月日を今は 麓にぞ見る」とある。
空海が十六歳の時、この霊山に心を打
たれ堂を立てたのが始まりだと言われ
ている。
その後も空海は何度かこの山で修行さ
れている。山門の方から登ると広い境
内に大師堂があり、少し離れて本堂が
ある。本尊は「千手観世音菩薩」。
山頂には大きな毘沙門天（びしゃもん
てん／武神）の像が建っている。



山頂付近はなだらかな公園になっており、美しい瀬戸内海と沿岸の平野が一望できる。

参拝を終え、その日は離れの宿坊に泊めてもらうことができた。

南の窓からは四国の山々が見渡せる心安らく部屋だった。

宿泊客はただ一人。

深山の静かな靈気の中、
畳の上に座り山々を眺め、
夜になると星々をあおぎ
心行くまで瞑想の境に浸っていた。

翌朝は遅く目が覚め、
本堂に行くと、住職さんが
団体遍路の方々に説法をされていた。

「観光とは、光を観ることです。

靈場の境内に入り、一步をしるす、
足跡を残す…それが旅なのですー」

(車で霊場近くまで行くことができます。現在では、ロープウェイが開通し一気に頂上付近まで行けるようになりました。全長2,600m、太龍寺ロープウェイに次ぐ長さ。山頂公園は、冬季スキー場となります。)

⑨ 第88番 医王山 大窪寺

(いおうざん、おおくぼじ) 標高500m



大窪寺の石段

四国八十八ヶ所最後の巡礼地、

「結願(けちがん)」の霊場。

「大窪寺」は、二つの「女体山(標高774mと761m)」に囲まれた窪地に建てられている。ちなみに774年は

空海が誕生した年である。

山道を登って行く女体山越の道と一般道路に沿ってゆくルートがあり、一般道路沿いの遍路道の方に多くの遺跡が点在している。

道路沿いの道を標識に沿って登って行くと、大きな山門が見えてくる。

門前茶屋がある方の石段を登って行くと、真正面に本堂があり、後ろには

「胎蔵ヶ峰(たいぞうがみね)」と呼ばれる霊山がそびえている。

境内には大きな銀杏の木がそびえ、手前では五大明王が迎えてくれる。

本堂の拝殿は母の胎への入出口、その奥にある奥殿（多宝塔）は子宮にたとえられる。

二つの女体山の間から万物生成の精妙なエネルギーが生じその気が奥殿に注がれて充満しているようである



奥殿は色鮮やかなホトケたちに囲まれた円柱の立体曼荼羅となっており、中央正面に医術の王「薬師如来（瑠璃光如来）」が祀られてある。

「薬師如来」の手には、薬壺ではなく水晶の法螺貝を持たれ、煩惱や病を吹き祓うのだと言う。

大師堂は少し離れてあり八十八ヶ所のお砂踏みができるようになっている。

大師堂に向かって左に空海像、右には大きな錫杖がそびえ、胎蔵界大日如来が彫られている。

錫杖の下の透明な部屋には、結願されたお遍路さんたちの金剛杖が山のように奉納されている。

その横に女体山を越えて来る遍路道があって、登って行くと、途中に「胎蔵ヶ峰奥の院」がある。山林の中、少し開けた窪地で断崖に祠が建っている。



大錫杖・大日如来

空海はこの地で、中国の恵果阿闍梨(けいかあじゃり)から授かった「三国伝来(インド・国・日本)の錫杖」を持たれ、一心に何かを「祈願」されていた!?. その秘密が結願の地・女体山「大窪寺」に秘められているように思えてならない。

真言密教は、古代インドのヴェーダやヨーガに仏陀の教えが融合して、チベットを経、中国を経て、そして空海によって日本に伝わって来た。

巡礼の長い長い旅の最後に、遍路は女体山に抱かれて万物の母の胎内に還る。(胎蔵界曼荼羅/たいぞうかいまんだら)

巡礼者は母なる聖霊に包まれ、全く純粹な魂となって、再び生まれ変わりを遂げる。四国遍路が「よみがえりの旅」と言われる一由縁である。



結願所・大窪寺(四国霊場開創 1200 年祈念の巡礼)

(四国そのものを胎蔵界曼荼羅として観る説もあります。結願の道の途中、道の駅ながお近くにある「[おへんろ交流サロン](#)」に寄ると、四国遍路についての情報がたくさんあります。本尊・薬師如来像は秘仏とされ通常拝観はできません。四国遍路開創 1,200 年記念の 2,014 年に御開帳があつて拝観することができましたが、奥殿の美しい波動も相まって崇高な輝きを感じました。二つの女体山へは、霊場前の道路を少し東に向かってゆき、左側にある林道を上がってゆくと各頂上に登ることができます。結願を終えた遍路は、最後に高野山に詣でます。)



<四国山岳霊場>別格霊場(4選)>



第3番月頂山慈眼寺 (がっちょうざん、じげんじ)

・標高556m 本尊:十一面観世音菩薩



第7番金山出石寺 (きんざん、しゅっせきじ)

・標高812m 本尊:千手観世音菩薩



第 15 番宝珠山箸葺寺 (ほうじゅうざん、はしくらいじ)
・標高 540 m 本尊: 金毘羅大権現

4



第 20 番福大山大瀧寺 (ふくだいざん、おおたきじ)
・標高 910 m 本尊: 西照大権現